



筑紫女学園大学リポジト

1700年前後の文法家の英文法観について (1)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田口, 純, TAGUCHI, Atushi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/235

1700年前後の文法家の英文法観について (1)

田 口 純

On the Grammarians' Views of English Grammar around 1700 (1)

Atsushi TAGUCHI

1. 「規範文法」の再評価

‘The Cinderella of English historical study’ の世紀と言われる18世紀は「規範文法」が確立された世紀とも言われ、特に20世紀のいわゆる「科学的文法学者」から「規範的」な方法を使用してきたと非難されてきた。しかし、近年、Gneuss, Tieken-Boon van Ostade, Beal などにより、その見方が再考され、単にその文法書を考察するだけでなく、当時の言語を取り巻く状況、文法の目的とその文法を利用する対象者などを考慮に置いた研究がなされつつある。たとえば、Beal (2004) では次のように述べられている。

1.1. Only very recently have a number of scholars, including Crowley (1991), Rodriguez-Gil (2002) and Tieken (2000), challenged this monolithic view of eighteenth-century grammars, turning to the original texts and viewing them and their authors in the social and intellectual context of their time. What emerges from these studies is that eighteenth-century grammarians had a range of motives for writing their grammars, and that these and later grammars, far from being uniformly ‘prescriptive’, would be better described as occupying different points on a prescriptive-descriptive continuum. (Beal 2004 : 89 90)

ここで Beal は、近年になって単にその文法書を考察するだけでなく、当時の言語を取り巻く状況などを再考する研究者が現れていることを述べ、これらの研究から、その当時の文法書を編纂する動機もさまざまであり、「規範的」なものから「記述的」なものまでいくつも違った点があり、「規範文法」という用語でひとくくりするわけにはいかないと述べている。Gneuss も同じような立場から18, 19世紀の英文法の見直しを提案している。

1.2. English grammarians, especially those of the eighteenth and nineteenth centuries, have been accused of employing prescriptive methods. ... Such sweeping judgments have gained popularity in histories of English and of English grammar, but fortunately in the light of more recent

scholarship, they have been revealed as anachronistic and in need of revision; more research needs to be done in this area. ... One also needs to consider the linguistic situation in the eighteenth century, as well as the aims of the grammars and the audiences for which they were intended: ... In future, it may seem more appropriate to speak of prescriptive tendencies rather than of prescriptive English grammar in the eighteenth century and later. (Gneuss 1996 : 31 32)

「イギリスの文法家，特に18世紀および19世紀のイギリスの文法家は，規範的方法を使用したと非難されてきた」が，「最近の研究に照らして」「このような判断は時代錯誤で見方を修正する必要があると認識されてきた」と述べ，「18世紀における言語的状况，ならびに文法の目的と文法を利用する読者をも念頭に置かなければならない」と述べている。そして，「今後は，18世紀およびその後の規範的英語文法というよりも，むしろ規範的傾向というにとどめる方が適切であろう」としてしている。さらに Tiekens-Boon van Ostade は，The codifiers and the English language: Tracing the norms of Standard English というプロジェクトの WebSite において，次のように述べている。

1.3. Lowth's grammar is rarely studied in great depth, particularly in relation to the language of the period. This was true thirty years ago, when Pullum (1974 : 63) commented that the book "is more mentioned than read by the majority of grammarians today", but it is still so today. And it is even rarer for Lowth's grammar to be considered in the context in which it was written, i.e. by a man who wished to do better in the world and who, through his grammar, enabled others to do likewise. (Tiekens-Boon van Ostade et al., WebSite)

Pullum (1974) では Lowth の文法書はよく引用されるが実際はそれほど読まれていないとあり，それは30年経った今も変わっていないとし，やはりここでもその当時の状況などによって見直す必要がある旨のことが述べられている。

このように従来「規範文法」という汚名を着せられていた18世紀の英文法であるが，再評価する動きが高まっている。本稿では，18世紀に入る前後の時期に範囲を絞って，その時期に出版された文法書5冊を対象として，それらの著者がどのような文法観を持っていたかを観察し，その意義を考えていく。この時期の文法家がどのような文法の定義を下し，誰を対象にして，その目的は何であったのかを考察することにより，その後急速に増加していくことになるいわゆる規範文法書の出現を再研究する道筋ともなればと思っている。

2. 時代区分の枠組み

本稿の時代区分の枠組みについては，次の林 (1990) にのっとっている。

近代期 [1500 1780]

近代英語学史・初期【文芸復興・宗教改革の時代】

1. 前期 思潮：人文主義運動と文献学 (1500 1600)

思想類型：英語非難

英語純粹主義論 / ラテン文法のモデル

英語非難・賞賛 / 英文法の発生

2. 後期 思潮：英語学の勃興 (1600 1660)

思想類型：英語賞賛 / 英語辞書の成立

英語文法の確立 / 普遍的字母論

近代英語学史・晩期【理性主義・啓蒙思想期】

1. 前期 思潮：新古典主義と合理主義 (1660 1710)

思想類型：普遍文法

英語アカデミー思想

2. 後期 思潮：文献学的権威の要望 (1710 1780)

思想類型：英語語彙の統制 / 英語研究の文法

規範英文法・修辞学隆盛 / 英語発音標準化

歴史主義傾向

(林 1990, pp. 77 78一部追加)

林 (1990)は思想類型と思潮から、近代期を1500 1780と設定し、それを近代英語学史・初期と晩期に分けている。これは次の理由による。

英国近代期の文献学を特色づけるものは、科学的な研究方法への志向が顕著になりはじめたことである。16世紀から、本格的な英語研究が文芸復興期の一般文献学的傾向のなかの重要な位置を占めることになる。この時期の初期を (1500 1660) に限定するのは、王政復古 (1660) の政治的事件による清教徒革命が終結したことによる。この初期の中間の時期を1600年に定めるのは、エリザベス一世の死 (1603) および最初の英語辞典 (1604)、ならびに『欽定英訳聖書』 (1604 1611) の文献学的著作による。(林 1990, pp. 77 78)

さらに、近代英語学史・晩期を前期と後期に分けているが、その根拠として次のように述べている。

近代英語学史・晩期のなかで、その後期の発端として、一応1710年を設定している。文芸史的には詩人で英語散文の確立者ジョン・ドライデンの死（1700）が世紀の変わり目であるために、この年代を中間時期とすることも一案であろう。しかし、政治的にはアン女王の死（1714）によりハノーヴァー王朝（ジョージ・二・三世～ヴィクトリア女王即位1837年まで）が始まることが重要な時期区分の理由となる。また、英語学史的には、カージーの英語辞典（1708）、スウィフトのアカデミー設立のための『提案書』（1712）やブライトランドとグリーンウッドの英文典（1711）により、1710年を中間時期と見なすことができる。（林 1990, p. 78）

本稿ではこの時代区分を受け、王政復古の1660年からいわゆる「文法戦争」の1712年までを取り扱うこととし、この間に編まれた文法書をみていくことにする。

3. 「近代英語学史・晩期（1. 前期）」の時代背景（概略）

具体的に個々の文法書に当たる前に、この当時の時代背景について概略を観ておくことにする。

3.1. Table 3.1. Social and economic conditions in England 1410 1680

4. Social order (After 1558)

Upward social mobility via the professions, marriage or acquisition of land; paths open especially before the 1640s. Inflation of honours and multiplication of the gentry during the early Stuarts. Consolidation of the middle ranks.

6. Culture (After 1558)

Illiteracy becomes a special characteristic of the poor. A semi literate society.

Increase in educational opportunity at all levels, enjoyed by higher ranks and upper levels of the middling sort.

Interest in higher education decreases from 1650 onwards.

English accepted as the national language suitable for most purposes.

(Nevalainen et al. 2003 : 35)

この Nevalainen et al. (2003) の資料には、1558年以降の社会秩序と文化・教育について示されている。これを見ると、1640年以前からすでに職業や結婚、土地の所有により社会的な上昇志向が現れ、Stuart 朝初期には gentry 階級が増加し、中流階級が統合されてきていることがわかる。また、識字率はとくに下層階級で低く、教育の機会があらゆる階級で増加し、上流階級や中流の上では増えている。ただ、高等教育への関心が1650年以降減少しており、英語はさまざまな目的にかなう国

語として受け入れられていったようである。

3.2. ... the interest of foreigners in English greatly increased in that time, so that the number of English grammars written by and intended for foreigners in the period of 1650 1700 is double the number of those written by native authors for English readers. (Poldauf 1948 : 86)

Poldauf (1948)によると、これから外国人の英語に対する関心が増加し、外国人を対象とする英文法が1650年から1700年の間には、英国人を対象とする文法書の2倍編まれていたことがわかる。

3.3. Thus the grammars of the sixteenth and seventeenth centuries were primarily intended for foreigners learning English, and for this reason some of them were written in Latin, ... There was clearly a need of foreign language textbooks of this kind, particularly among the Huguenot refugees who had fled to England, ... In the eighteenth century, grammars of English were mainly textbooks intended for English teachers and pupils, but also for adults wishing to improve their ability to express themselves in their native tongue. (Gneuss 1996 : 28 29)

Gneuss (1996)は、先ほどのPoldaufと同じく、「16世紀および17世紀の英語文法は主として英語を学ぶ外国人のためのもので、そのためラテン語で書かれたものもあった」ということであり、「この種の外国語修得のための教則本がとりわけイギリスへ逃れてきたユグノー教徒達に必要であったことは明らか」だとしている。1685年にフランスでナントの勅令が廃止されると、商工業者の中心を占めていたユグノーたちがイギリスその他の国に亡命したことで、その目的のために英文法書が必要になってきたことがわかる。18世紀に入ると、「英語の文法は主にイギリス人の教師と生徒のための教則本として、そしてまた母語での表現能力をいっそう高めたい大人のために書かれ」ている。このような時代背景をもとにした1700年前後の文法書がなぜ編まれたのか、5人の文法家たちの文法書を以下考察していく。

4. 「近代英語学史・晩期 (1.前期)」の文法家の英文法観

林 (1990) の時代区分でいう「近代英語学史・晩期 (1.前期)」には、Alston(1965)によると、次のような文法書が現れている。Wallisの初版は1653年であるが、第2版が1664年に現れている。これは1740年まで改版されて続いている。次に、Newton, Lyeが現れ、1685年にChristopher Cooperの文法書が現れる。さらに、Miège, Aickinが現れ、世紀の変わり目ともなる1700年にA. Laneの文法書が現れる。よって、Alstonによると、王政復古以降1700年までに現れた文法書はここまでとなる。本稿ではこの中から代表的なCooperとLaneを取り上げる。その後無名氏の文法書が1706年に、Turnerのが1710年に著され、1711年から1712年にかけてBrightland, Greenwood, Maittaire

と相次いで3人の文法家による文法書が現れ、「文法戦争」とも呼ばれる時期を迎える。そこで、1700年以降の文法書としてこの3人の文法書を次稿で取り上げる予定である。

それではまず Cooper を見ていく。以下、枠囲みになっているのが今回取り上げた文法書の著者とそのタイトルである。それぞれの最初に記されている括弧付きの数字は Ian Michael(1970)の Appendix VI によるものであり、また、Alston I とあるのは、Alston (1965)にある番号に当たる。

- 4.1. (57) Christopher Cooper, *Grammatica Linguae Anglicanae*. London 1685.
(Alston I, No. 29.)
(58) Christopher Cooper, *The English Teacher, or the discovery of the art of teaching and learning the English tongue. Fitted for the use of schools, and necessary for all those that desire to read, write, or speak out tongue with ease and understanding*. London 1687.

Cooper は1685年に *Grammatica Linguae Anglicanae* をラテン語で著し、その2年後の1687年には *The English Teacher* を英語で著している。先ほどの Poldauf や Gneuss の説明からわかるように、1685年のラテン語で書かれたものは対象者が外国人であり、その一方1687年の方はその対象者が外国人だけではなく、英国人になっていることが以下の文章でわかる。

4.1.1. By which means, the way of Writing, which could be attain'd onely by much Reading, and strict Observation, may in a few Weeks, nay perhaps in a few Days, if not hours, be throughly learn't, and the grounds and reasons plainly discovered and understood. Which cannot surely, but be very grateful to all Gentlemen, Ladies, Merchants, Tradesmen, Schools, and Strangers (that have so much knowledge of our English Tongue as to understand the Rules;) and generally to all those that desire with Ease and Understanding to speak, read, or write English; who have not time or occasion to read over many Books, or consult a Dictionary at every turn among a great ... (Cooper 1687 : 3)

ここで Cooper は、to all Gentlemen, Ladies, Merchants, Tradesmen, Schools, and Strangers としており、to all those that desire with Ease and Understanding to speak, read, or write English と述べている。

4.1.2. Thus I have finished that, which I at first designed and judged most necessary to my present purpose; that is, to give the most clear, full, and perfect account of the best, and easiest way to Read and Write our English Tongue. If any one desires to understand the frame or constitution of our Tongue, may consult *Grammatica Linguae Anglicanae*; wherein I have treated of the Etymology of Nouns, Verbs, and Adverbs. (Cooper 1687 : 120)

これは1687年版の終わり近くにある文章であるが、ここでもその目的を to give the most clear, full, and perfect account of the best, and easiest way to Read and Write our English Tongue と記している。この1687年の *The English Teacher* について、その編纂者の Sundby は以下のように述べている。

4.1.3. To all intents and purposes, E [*The English Teacher*] is a translation of A [*Grammatica Linguae Anglicanae*] but is an abridged version, for most of the chapters on etymology and grammar that form the third part of A have dropped out. (Sundby 1953 : vi vii)

4.1.4. E was primarily intended, the title page states, 'for the Use of Schools'. Its aim and purpose was 'to give the most clear, full, and perfect account of the best, and easiest way to Read and Write our *English Tongue*' (E 120.12ff). ... The work was planned with a pedagogical eye. (Sundby 1953: vii)

4.1.5. With E, Cp breaks away from the tradition of writing English grammars in Latin, but the influence of classical learning makes itself felt in this work, too. (Sundby 1953 : viii)

この英語版は1685年のラテン語版の簡略版であり、詳細な文法を扱った第3部は省略されている。また、英語版のタイトルからわかる通り、この文法書は教育的見地から編まれたものである。さらに、1685年版はラテン語で書かれているが、その2年後には英語で書き、内容自体はラテン語に依拠しながらも、それまでのラテン語で書くという伝統を破ったことは注目すべきことかと思われる。このことについては4.1.6にある通り、Poldauf が言及しており、これについては渡部 (1975) でもくわしく述べられている。

4.1.6. His *Grammatica linguae Anglicanae* (1685) is the last English grammar written in Latin. (Poldauf 1948 : 90)

さらに、Poldauf は次のようにも述べている。

4.1.7. English as a particular subject of the curriculum gradually gained admission to British schools in the latter half of the 17th century. The school books printed for this purpose are, however, quite elementary. (Poldauf 1948 : 91)

17世紀後半には英語を学校のカリキュラムとして受け入れるようになってきたので、教科書としての必要性が出てきたようである。また、Vorlat (1975) には次のようにある。

4.1.8. Being a teacher, Cooper has written his work for children. But also grown ups, many of whom are deemed unable to write without mistakes, are supposed to need the work, especially those living abroad, who are in perpetual danger of spoiling their mother tongue: ... Foreigners, too, need to learn English for practical, social and cultural reason: ... (Vorlat 1975 : 31)

Cooper は子供のために文法書を書き、また、正しい英語を書くことが求められている大人や、外国人もその必要性があったようである。時代背景で見たように、英語を必要とする外国人だけではなく、上昇志向を求める英国人やその子供たちにも徐々に英文法書が必要になってきていることがわかるかと思われる。

次に、1700年に著された Lane の *A Key to the Art of Letters* を見ていく。

4.2. (146) A. Lane, *A Key to the Art of Letters: or, English a learned language, full of art, elegancy and variety. Being an essay to enable both foreiners, and the English youth of either sex, to speak and write the English tongue well and learnedly, according to the exactest rules of grammar. After which they may attain to Latin, French, or any other forein language in a short time, with very little trouble to themselves or their teachers. With a preface shewing the necessity of a vernacular grammar.* London, 1700; 1705. (Alston I, Nos. 36 and 37.)

さきほどの Cooper の英語版から13年後に著されたこの英文法書は、その副題からもわかる通り、「英国人および外国人の男女に文法の最も厳密なる規則を教えようとするもの」であり、渡部 (1975) にもあるが、古典語は learned language であるのに英語はそうではないと考えられているのは、「文法が確立していないからだという考え方が背後にあって、こういう英語の地位を上げるという愛国的な目的のために」本書が書かれたようである。文法の目的としては次のように述べている。

4.2.1. ... the true End and Use of Grammar is to teach us how to speak and write well and learnedly in a Language already known, according to the unalterable Rules of right Reason, which are the same in all Languages how different soever they be. (Lane 1700 : x)

また対象者として女性をはっきりと示していることが次の文章からわかる。

4.2.2. And if the Author has found out the true Secret of an easy and rational Education that may prove to the advantage of the fair Sex who have so many Slightings and Affronts put upon them for want of Learning, he thinks all his Pains and Labour happily bestow'd. (Lane 1700 :

これについて渡部 (1975) は、「今まで学問がないため軽蔑されてきた女性(the Fair sex)のためにもなることだ、と言っているがこれも新しい感覚」と述べている。英国人の成人男性だけではなく、女性に対しての教育が必要であることがここから読みとれる。

Lane の考える文法とはどのようなものか、次の4.2.3からわかる。

4.2.3. Quest. *What is Grammar?*

Answ. Grammar is an Art that Teaches the Right Way of Speaking and Writing, according to the particular Form of every Language. (Lane 1700 : p. 1)

Lane の文法書は問答形式で書かれている。文法とは正しく話したり書いたりするための技術であると考えているようである。ただ、次の4.2.4にもあるように、教育的見地から文法書を編んでいるが、その主たる関心は普遍文法にあったようである。

4.2.4. ... Lane might have been expected to focus his attention upon the educational side of English grammar, but, instead, his main concern is universal grammar as it is seen in the structure of the English language. (Poldauf 1948 : 92)

また、Wallis 以来の伝統ともなるラテン語をもとにした英文法書の編纂を Lane も行なっている。

4.2.5. Latin is his chief concern in his *Rational and Speedy Method of Attaining to the Latin Tongue* (1695), but even later, in his *Key to the Art of Letters* (1700) he does not try, as Wallis did, to detach himself from the Latin system. Even this is characteristic of the ensuing period. The definite separation of the Latin and the English grammatical systems is not achieved at all in the 18th century, though there is a great step forward in the latter half of it.

(Poldauf 1948 : 93)

Poldauf は Leonard (1929) で非難されているいわゆる規範文法家としての態度について、4.2.6のように述べ、時代がそれを欲していたことがわかるかと思われる。中世から近代へ時代が移り変わり、階級制度が変化し、中流階級の上昇志向が強まっていく中で、英語の英国内における位置にも変化が必要となってきたのであろうか。

4.2.6. It is certainly unjust of Leonard to regard Lane and Richard Johnson as the first two grammarians who desired “that we should learn English by rule”. Both Lane and Richard Johnson

regarded and regularity as something inherent in any grammatical structure, but in this they were children of their age. (Poldauf 1948 : 94)

参 考 文 献

- Alston, R. C. 1965. *A Bibliography of the English Language From the Invention of Printing to the Year 1800. Volume One, English Grammars Written in English and English Grammars Written in Latin by Native Speakers*. Leeds: E. J. Arnold & Son Limited.
- Beal, Joan C. 2004. *English in Modern Times 1700 1945*. London: Arnold.
- Cooper, Christopher. 1685. *Grammatica Linguae Anglicanae*. 南雲堂英語文献翻刻シリーズ第4巻 東京：南雲堂, 1967.
- . 1687. *English Teacher*. (Ed. by Bertil Sundby) Lunds Universitets Arsskrift. N. F. Avd. 1. Bd 50. Nr 5. Lund: C. W. K. Gleerup.
- Gneuss, Helmut. 1996. *English language scholarship: a survey and bibliography from the beginnings to the end of the nineteenth century*. Binghamton, New York: Center for Medieval and Early Renaissance Studies, State University of New York at Binghamton; 大泉昭夫訳 『英語学史を学ぶ人のために』 京都：世界思想社, 2003.
- 林 哲郎. 1990. 『英語学史研究への道』 東京：開文社出版.
- Kennedy, Arthur G. 1927. *A Bibliography of Writings on the English Language from the Beginning of Printing to the End of 1922*. Cambridge & New Haven: Harvard University Press; (Reprinted) New York: Hafner Publishing Company, 1961.
- Lane, A. 1700. *A Key to the Art of Letters etc*. 南雲堂英語文献翻刻シリーズ第8巻 東京：南雲堂, 1969.
- Michael, Ian. 1970. *English Grammatical Categories and the Tradition to 1800*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nevalainen, Terttu and Helena Raumolin Brunberg. 2003. *Historical Sociolinguistics: Language Change in Tudor and Stuart England*. London: Pearson Education.
- Poldauf, Ivan. 1948. *On the History of Some Problems of English Grammar before 1800*. Prague Studies in English, Prag: Nakladem Filosofiche Fakulty University Karlovy.
- Tieken Boon van Ostade, Ingrid et al. "The codifiers and the English language: Tracing the norms of Standard English". <http://www.lucl.leidenuniv.nl/index.php3?m=2&c=122>.
- Vorlat, Emma. 1975. *The Development of English Grammatical Theory 1586 1737 with special reference to the theory of parts of speech*. Leuven: Leuven University Press.
- 渡部昇一. 1975. 『英語学大系13 英語学史』 東京：大修館書店.